

ざいそう

シャトー・トゥール・オー・コサンと杉田秀夫さんのこと

佐野 幸洋



■ワインづくりの本質

フィリップ・クリアン氏はボルドーのバ・メドックでトゥール・オー・コサンを営む当主であり、至高のワインを夢見て農作業に励む農夫でもある。

クリアン氏の著した「メドック 至高のワインづくり」は今までのワイン本とは一線を画した好書である。ワイン本と言えばパーカーなどによる味の評価に焦点を当てたものやロビンソンなどによるワインの入門書、概要書の類いであふれかえっている。しかしこの本は違う。そこには葡萄や醸造など実務に携わる人の息吹とともに1年間の葡萄栽培、醸造作業により風車エチケットのワインが誕生する様が詳述されている。

冬の何ヶ月間のつらくて果てしない剪定作業、三月の深耕作業の重労働、四月末の土寄せ、春の草取り、六月の蕾が悪天候や気温的低下で受粉しない不安、成長を託す二つの新芽以外の除去作業、伸びすぎた葉の剪定、寄生虫や病害虫との乱闘、1年を徒労にしてしまう収穫期の雨など、リスクにめげず至高のワインを求める続ける試行錯誤が描かれている。

クリアン氏は言う。「夏に行う葉のカットはあと4cm高ければ木の生長に養分がまわり、4cm低くカットすれば実に栄養がゆきわたりにくくなる。ほどよい生育環境を作ることはいつも重要である。ワインの品質を知るには翌年4月のテイスティングを待たずとも葉のカットに注目すれば十分なのだ。醸造過程で多少の小細工は弄せても品質にはっきり現れる」「イタリアに旅しダビンチやラファエロなど古今の傑作にふれ感受性を磨く。この感性がワイン造りには必要なのだ」。

商業主義に毒されたいい加減なワインづくりや売らんがための広告が多いなか、なんと合点納得の記述だろうか。ワイン選びは巷で喧伝される収穫年、葡萄の品種、土地、値段よりも誰が作ったかがより重要である。ワインは人。これが今のところの私の結論である。

■土木技術者のあり方

「技術者たるもの現場を目で見、肌で触れるべし」

「土木は直接自然と向き合う仕事である。自然の大きさ、恐ろしさを生々しく体験できる職業である。神に対する畏れが自ら生じる」「巨大なものを作ったからといって作った人間の人生が偉大であるわけではありません。人生の深みは、人間的な迷い、悩み、苦しみの深さを通して生まれるものだと思います」。

これらは杉田語録の一つである。

杉田秀夫さんは「プロジェクト X」で紹介されているとおり現場第一主義の生粋の土木屋で、その生き様は自ら尊敬する最後の海軍大将・井上成美に通ずるところがあると私は思っている。

■新たな危機をむかえて

クリアン氏と杉田さんに共通するのは「本質は現場にあり」を見抜き、汗をかき試行錯誤を繰り返し、自然から学び技術のみならず人生の磨き方、高め方をも示していると思う。しかし、今このような機会は次第に遠ざかろうとしている。

昨年の道路公団民営化により私が携わる長大橋の保全業務は管理費削減とともに複雑かつ本質から外れた事務手続きに大きな労力が課せられている。

これにより技術者のモチベーションが低下するのも当然至極であり、管理を怠ったため大きなツケを今もなお払いつづけるアメリカの高齢吊橋と同じ道をたどる悪夢が頭を過る。

しかし、幸い我が会社には橋の建設に直接従事した技術者が多く残っている。橋に愛情、慈しみも持っている人々がいる。杉田さんなど諸先輩の遺志を受け継いだ人材が200年の橋の耐用年数を目指し、現場で地道な努力を重ねてくれるインセンティブづくりが私の役割と思っている。

それにしてもワイン好きの杉田さんと国家戦略が迷走する我が国の社会資本に関わる技術者のあるべき姿を議論できないのは何とも寂しい。